

リスニングの指導に関する一考察

— 高等学校英語II Aの教科書分析 —

広島大学大学院 山下 淳子

0. はじめに

外国語教育の歴史の中でリスニングというスキルは、スピーキングの影に隠れてほとんど無視されていた時代があった。その背景には、Productionに力点を置いた Audio - lingual Methods の考え方から、リスニングは静的で受動的な学習だとみなされていたこと、スピーキングを教えればリスニング能力は自然に伸びる (Fries 1945) と考えられていたことなどがある。この当時のリスニングへの取り組みは、listening for speaking であり listening for understanding ではなかったのである (Nord 1981)。しかし、学習の初期にリスニングに集中させる教授法の有効性が報告されて (Asher 1971, Postovsky 1974) リスニングに注目が集まるようになり、さらに音響音声学や心理言語学からの知見が取り入れられ、listening comprehension (以下 LC) は、聞き手の積極的な働きかけを無視することのできない複雑な過程であることが認められてきている (河野 1976a)。本論文では、まず情報処理アプローチからリスニングを考え、次に教科書の分析に基づいて現在のリスニング指導の基本的態度をさぐってみたい。

1. 情報処理アプローチ

言語理解の情報処理アプローチでは、次のことが前提となっている。

humans are limited - capacity information processor

(McLaughlin et al. 1983 : 137)

つまり、人間が一時に処理できる情報には限りがあるということで、この立場からは、慣れない外国語を聞いて理解できない状態が次のように説明される。

If, for example, one is exposed to a rapid flow of speech in a language one does not know, the effect is that information-handling capacity becomes over loaded and one eventually "switches off".

(McLaughlin et al. 1983 : 137)

では、なぜ慣れない外国語で情報過重になった状態を、人は「英語が速い。ついて行けない。」と表現するのだろうか。言語処理のスピードについて考えてみたい。

河野 (1976b) は、リスニングの心理的速度感は、ポーズ込みのスピードと一致すると述べている。発話のスピードそのものは変わらなくても、ポーズを多く挿入することで、それほど速いと感じなくなるというのである。これは、ポーズが聞き手に情報処理のための時間を与えてくれるからである。同じことが ESL 学習者のリスニングを助ける要因としてスピードと、インプットの修正を比較した Kelch (1985) の実験からも示唆されている。インプットを易しくするより、発話のスピードを遅くした方が理解の助けになったというのである。逆にいえば、外国語の LC を阻む要因の一つは、聞き手から見た「処理時間の不足」であるといえよう。リーディングなら自分のわからないところで立ち止まり、じっくり考えることができるし、必要なら逆もどりして

読むこともできるが、リスニングではそれができない。聞き手は、線状に入ってくる外国語の流れを一回で受けとめ処理をするという仕事を次々とこなしていかななくてはならない。

いかにしてこの作業が続いていくのだろうか。ここでは、Automatic - processing, (以下 ATP) と Controlled - processing (以下 CTP) (McLaughlin et al. 1983) の概念を使って考えてみたい。この二つの過程は、言語処理がいかにルーティーン化されているか (いかに注意を払わず自動的に処理が行なわれているか) によって区別される。ATP は自動化された処理過程を意味し、時間も労力もあまり費やさない。CTP は、逆に多くの注意を伴って行なわれる処理過程である。母国語の場合は ATP が確立しており、ある言語形式の運ぶ意味は自動的に抽出され、深く考えなくてはいけない部分に注意を集中させることができる。一定量しかない人間の注意力を選択的に有効に使えるともいえよう。しかし、外国語の場合は ATP が確立していないため、すべての言語形式を CTP で処理せざるをえず、先に述べた情報過重の状態になってしまうのである。Conrad (1985) は、good listener と poor listener のストラテジーを比べ、前者は semantic cue に頼り、後者は syntactic cue に頼る傾向があるという結論を出しているが、good listener は形式面の処理が早くすみ、意味へ注意を向ける余裕があるが、poor listener は言語形式を受け止めるだけで精一杯の状態であるといえよう。このように、言語処理のスピードは、どれだけの注意をルーティーンな処理過程から解放して CTP に回せるか、つまり ATP がどれほど獲得されているかという点から考えられるであろう。Nagle and Sanders (1986) は、ATP 獲得の必要性を次のように主張している。

Automatic processing is critical to comprehension because too much controlled processing may lead to overload and breakdown.

(Nagle and Sanders 1986 : 16)

では、どのような単位で ATP を発達させれば良いのだろうか。いいかえれば、教師はどのような単位で音声としての英語を提示すべきだろうか。人間は、音素や単語を単位としてでなく、句のようなある種の文法単位で聞き取りを行なっているという。(Foder et al. 1965)

また、同化、弱音化、音の脱落など、談話の中で様々に変わる英語の音声の特徴を考えても単語の発音を一つ一つ聞かせるだけでは学習者の聴解力を向上させることは望めない。単語よりも大きい発話上のまとまりを音のかたまりとして処理できるように指導することが必要である。ここでは、そのような指導上の知覚の単位として Ur (1984) のいう Common English Collocation をあげておきたい。その定義と例は以下のようになる。

Specific, common, colloquial word - combinations where the shortenings, and occasional distortions together with a high speed of delivery make it particularly difficult for the learner to disentangle the components.

Spelling	Sound
let's have	'letsəv
I'll be (going)	əbɪ('gəʊɪŋ)
got to	'gɒdə
he doesn't like it	ɪ'dʌzŋ'laiḱɪ?
there isn't any	'ðɪzŋdenɪ
and so on	ən'səʊwɒn
excuse me	'skju:zmi:
you shouldn't have	ju:'ʃʊdnədəv
more and more	'mɔ:ɪrən'mɔ:
I'm going to	əŋ'gəʊɪntə
I want to see it	ə'wɒnə'si:ɪ?

(Ur 1984 : 45-46)

短縮形の指導の効果を報告した、鈴木・添田 (1977), Brown J. D. (1986) なども同じ考え方に立つと思われる。これらは、英語の音声変化の指導と根本的には同じであるが、どのような単位で音変化を教えるのかを考える時、Ur の提案は役に立つと思われる。

以下は、これまでの考察も踏まえて、現在指導用に作られている教材の特徴をとらえてみようとした試みである。

2. 教材の分析を通して

2.1. 分析方法

とりあげた教材は、高等学校外国語科の中の英語 I I A の教科書三冊である。英語 I I A は聞くこと、話すことの言語活動を重点的に指導することを目的とした科目である。(文部省1969) ゆえに、リスニング指導に対する教材制作者側の配慮、態度が、最も反映されやすいのではないかと考える。

現在発行されている以下三冊の教科書の練習形態と本文の内容を、テープ録音のある部分のみ分析した。なお、スピーキングだけを目的とした練習問題は細かく分類はせず、「表現練習」「対話」「発表」の形で、表の下の方にまとめた。

英語 I I A の教科書

(EP, LT, NC などはそれぞれの略号として便宜上設定したものである)

In English Please IIA, Listening and Speaking Revised Edition -- EP (開隆堂)

Picture Lessons Let's Try! IIA -- LT (一橋出版)

Revised New Creative, CONVERSATION IIA -- NC (第一学習社)

各教科書の構成

EP -- 30 lessons

LT -- 13 lessons & 12 picture lessons

NC -- 20 lessons

2.2. 結果と考察

練習形態

	EP	LT	NC	TOTAL
WD	30	0	0	30
PD	0	12	13	25
Q & A	30	11	14	55
L & pron.	30	0	6	36
L & rep.	30	0	6	36
PM	0	5	2	7
L & act.	0	1	4	5
T or F	0	0	5	5
その他	0	0	7	7
表現練習	30	0	4	34
対話	90	20	18	128
発表	30	10	9	49

WD : whole dictation
 PD : partial dictation
 Q & A : question and answer
 L & pron. : listen and pronounce a word
 L & rep : listen and repeat a sentence
 PM : picture matching *
 L & act. : listen and do some activity **
 Tor F : true or false

* : 本文の内容と一致する絵を選ぶ
 ** : 聞いて、表や絵を完成させる

本文の内容

	EP	LT	NC	TOTAL
日常生活	20	20	10	50
外国の話題	10	0	0	10
日本の伝統	0	3	0	3
社会問題	0	1	1	2
習慣の違い	0	0	3	3
その他	0	1	6	7

まず I I A の教科書を見て気づくのは、どれも挿し絵が充実していることであった。テープに録音されたストーリーの展開に従ってたくさんの絵が提示してある。これは、視覚的ヒントを多くいれて、実際のコミュニケーション場面に近づけようとする配慮であろう。また、構造主義の時代に頻繁に行なわれた音素の識別練習が見られないこと、それよりも聞いて表や絵を完成させたり、聞いた内容と一致する絵を選ばせるなど、細かい言語形式にこだわるより情報の中核をとらえるという聞き方を要求する練習が取り入れられていることなどには、Brown and Yule (1983: 57) が“— the aim of a listening comprehension exercise should be for the student to arrive successfully at a reasonable interpretation, and not process every word, and not to try to work out all that is involved in the literal meaning of the utterance, since that is, in principle, an impossible task.” と述べた考え方が反映されている。また、題材として日常生活に関する話題が多いことも、学習者が共通にもつ背景知識を考慮してのことであろう。

しかし、リエゾンや同化、脱落、弱音化などの英語の音声的特徴そのものに学習者の注意を向けさせるような練習は、ここに見た限りほとんど見られなかった。New Creative の「その他」に分類されたものの中に、一部そのような例があったが、ごくわずかであった。ATP 獲得には過剰学習が必要なのであるから (Nagle and Sanders (1986 : 16) はこの点を“Automatic processes require sufficient training to develop, —” と述べている) 音声面の指導に重点をおく教材ならばもっと英語の音声的特徴そのものを聞かせ、獲得させる練習があるべきなのではないかと思われた。しかし、教材の上にそれが見られないのはリスニング領域の研究があまり進んでないことを示しているのかもしれない。

3. まとめ

本論では、まず情報処理的アプローチからリスニングを考え、外国語の LC が効率良く行なわれるためにはその外国語の音声に対して ATP を獲得する必要があることを述べた。次に、現行の英語 I I A の教科書には、コミュニケーションの立場からオーセンティックなリスニング活動

をさせるような配慮がなされていることを指摘した。もっとも、教科書は教師によって生きてくるものであるし、英語 I I A は外国語科の中のごく一部にすぎないので、このたびの分析だけでリスニング指導の現状について決定的なことは言えないが、少なくとも教材作成者側の基本的態度を見ることができたのではないかと思われる。

理解は言語情報のみからもたらされるのではなく、文脈や言語外の情報、そして学習者の認知構造の果たす役割が大きいのであるから、指導に際してはその点を考慮する必要がある。Dunkel (1986) が prelistening, listening, postlistening, と言い表わしたようにただ聞かせるだけでなくその前後の指導が大切である。しかし、リスニングにとって一番基礎になるのはしっかりした英語の音声の処理能力である。視覚的のヒントを与えたからといって、それがいつも理解を助けるとは限らないという報告もある (光山1976, Mueller 1980)。学習者が一人立ちしてリスニング活動を行なえるだけの力をいかにして養成すればいいのか。この問題についてこれからも考えていきたいと思う。

<REFERENCES>

- Asher, J. J. (1972) "Children's First Language as a Model for Second Language" *MLJ*, 56, 3, March 133-139.
- Brown, J.D. & A. Hilferty. (1986) "The Effectiveness of Teaching Reduced Forms of Listening Comprehension" *RELC Journal*, 17, 2, 59-70.
- Brown, G. & G. Yule. (1983) *Teaching the Spoken Language*. Cambridge University Press
- Conrad, L. (1985) "Semantic Versus Syntactic Cues in Listening Comprehension" *SSLA*, 7, 59-72.
- Dunkel, P. A. (1986) "Developing Listening Fluency in L2: Theoretical Principles and Pedagogical Consideration" *MLJ*, 70, 2, 99-106.
- Forder, J. A. and T. G. Bever. (1965) "The Psychological Reality of Linguistic Sements" *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 4, 415-420.
- Fries, C. C. (1945) *Teaching and Learning English as a Foreign Language*. The University of Michigan Press.
- Kelch, K. (1985) "Modified Input as an Aid to Comprehension" *SSLA*, 7, 1, 81-90.
- McLaughlin, B., T. Rossman., & B. Mcleod. (1983) "Second Language Learning: An Information-Processing Perspective" *LL*, 33, 2, 135-158.
- Mueller, G. A. (1980) "Visual Contextual Cues and Listeing Comprehension: An Experiment" *MLJ*, 64, 3, 335-340.
- Nagle, S. J. & S. L. Sanders. (1986) "Comprehension Theory and Second Language Pedagogy" *TESOL Quarterly*, 20, 1, March. 9-26.
- Nord, J. R. (1981) "Three Steps Leading to Listening Fluency: A Beginning" in Winitz, H. (ed.) *The Comprehension Approach to Foreign Language Instruction*. Newbury House Publishers, Inc.
- Postvsky, V. A. (1974) "Delayed Oral Practice" in Blair, R. W. (ed.) *Innovative Approaches to Language Teaching*. Rowley, Massachusetts, Newbury House Publishers, Inc.
- Ur, P. (1986) *Teaching Listening Comprehension*. Cambridge University Press
- 河野守夫 (1976a) 「『Listening の過程』概観外国語の科学的研究のために」『外国学研究 I』神戸市外国語大学, 117-148.

_____ (1976b) 「ヒアリングの過程とポーズ」『英語教育』24, 12, 20-23. 大修館.

鈴木千鶴子・添田 裕 (1977) 「LL 授業システム化試案英語の『弱形』指導の場合」*Language Laboratory* 14, 58-70.

光山和雄 (1976) 「英語聴解に及ぼす映像刺激の影響」『英語教育』24, 12, 17-19.

文部省 (1969) 『高等学校学習指導要領解説 外国語編英語編』一橋出版.